2011/04/01

東日本大震災・大津波災害ボランティアに参加して（お礼とご報告）

エスペランサ 木工隊

3.11東日本大震災・大津波は3週間を経てもなお、その被災の大きさ、深さを測ることも叶わず、未だ現地では肉親の姿をガレキの中に探す姿もあります。
また数10万人におよぶ被災者は仮の宿での苦難を強いられ、明日への希望も見いだせずにいるというのが偽らざる実態であることでしょう。

私たち木工家具制作を生業とする3名のメンバーで構成された「エスペランサ木工隊」は、22日から27日までの期間、大震災・大津波の被災地の１つである石巻市に入り、災害支援ボランティアの一員として活動してきました。

この結成にあたりましては、みなさま方の貴重な義援金、および支援物資を頂戴いたしました。
私たちはこれを有効活用させてただくことで、現地での有為な活動、および困難な往復の行程を無事に完遂することができ、このようにご報告できることをみなさま方とともに喜びたいと思います（「喜ぶ」という物言いのいかにも不都合さ、気まずさが、この種の活動には解き放ちがたいものがありますが）。

みなさま方も既に連日の様々な報道から現地の状況には詳しいと思われますので、逐一説明する事も無いと思いますが、現地で活動の合間に撮影した画像などもご参照いただき、私たちの活動へのイメージを持っていただければ幸いです。

この度のボランティア活動は石巻市ボランティアセンターに拠点を定め、センター職員（主要には石巻市社会福祉協議会スタッフ、およびNPO、NGO連絡協議会スタッフらで構成）との連携の下、石巻市内の被災者住宅に出向し、ヘドロ浸水で使用不可能となった家財の後片付け、撤去、搬送などの作業、およに避難所への炊き出しの手伝いなどを中心として担ってきました。

震災被害後10日も経とうというのに、全く何も手が付けられていない状態の家屋へのアクセスは、襲った震災、津波被害のすさまじさを想像させるに十分に過酷なものでした。

私たちが担った被災者の方々は、やっと10日を経て、それまでの人生が投下され、忘れがたく、思い出深い諸々の家財の全てを捨て去るという決意ができていたのか、あるいは私たちの精力的な働きに促されてしまうと言う力学もあったのか、きっぱりと人生をリセットするのだという強い意識をそこに見いだし、圧倒されたものです。
今こうしてこの文書を書いていましても、その時の被災者のお姿を思いだし、涙があふれて困ります。

彼らの受けた受難の厳しさと、再起へ向かう決断の潔さというものは比例するかのように思わされるものでした。

私たちは「木工隊」として旗を掲げ、現地に赴いたのでしたが、復興への足取りもままならない段階での活動ということで、必ずしも十分に職能を活かした活動に従事できたわけではありません。
せいぜい後片付け、撤去の際にチェンソー、バールなどの工具を使った程度でしたが、恐らくは被災地での復旧、復興には多くの時間と膨大な資金の投入、また継続的なボランティア支援は欠かせなくなることは必定です。

私たち日本人は、阪神淡路大震災を経験していますが、福島第1原発をめぐる予測不可能なクライシスを別としましても、かつて経験しなかったほどの困難を前にし、大きな勇気と、揺るぎのない復興への信念を固めなければならないでしょう。
あえて類推させていただくとすれば、第二次世界大戦の敗北につぐ、歴史的な受難として見据えねばならない事態であるでしょう。

そうした課題を前にし、私たち木工屋がなすべきことも、徐々に具体化し、見えてくる時もくるはずです。
あるいは、今後もこのような震災が避けがたい日本列島に住み、木工を生業とする者として、震災対応における木工屋の為すべきこと（afterではなく、beforeの段階で）も考えていかねばなりません。
智恵と勇気が求められているのです。

今回の災害ボランティア活動も、そうした中長期的な展望に立ち、活かしていけるようなものとして、みなさま方と共有し、共に前に進んでいく１つのきっかけになるのであれば、困難を排して赴いた意味もあるのではと考えています。

こうした一定の成果を獲得できましたのも、皆さまの被災地への熱い思いと、私たち派遣メンバーへの共感から発する篤志の賜物と考えています。
心よりの感謝を込めて、厚く御礼申し上げたいと思います。

また大阪を中心として活動されている「木の仕事の会」の方々からの心温かいご支援を受けたことを銘記させていただかねばなりません。
本当にありがとうございました。
どうか今後もご支援のほど心よりお願いいたします。

杉山裕次郎　服部 篤　堀内 圭　拝

毎朝ボランティアセンターで活動登録をする（石巻ボランティアセンター）

ここには全国から数多くのNPO,NGOが馳せ参じ、石巻市ボランティアセンターの統括の下で、自律した被災者支援活動に奔走します。

過酷な気象条件の下で

3月も下旬だというのに、毎朝氷点を大きく下回る気象条件と、止む気配のない強い余震の下での活動でした　が、隊員は意気軒昂に活動し、被災者に寄り添い、お手伝いする活動に従事することができました。

ヘドロで埋め尽くされた石巻市街

活動した石巻市街はほぼ全域において津波で洗われ、ヘドロ混じりの汚水で浸水され、倒壊した家屋、へし折れた電柱、流れ着いたガレキ、陸に上がった船で破壊されているのでした。

下の衛星写真は震災直後のものですが、○で囲われた家屋が初日、2日目の支援対象地域です。

石巻市街はビルの倒壊、車両の無秩序な散乱と破損、そして多くの漁船、ボートが陸に上がりビルに突き刺さり、狂気と化していました。
その中には、未だに収容されない犠牲者もいたのかもしれません。
形あるもの全てが壊滅し、抜けるような空が美しいだけに、この世のものがとても空無に感じさせるのでした。

私たちの活動は石巻市内の被災者住宅に襲った津波によるヘドロ混じりの浸水で倒壊した家財道具の片付け、撤去、および避難所に暮らす方々への炊き出しなどで、まさに被災者支援の初期段階を担う重要な活動でした。

下は支援対象の花屋さんの住宅兼店舗のお宅の様子です。
昨年ご主人を亡くされたばかりのご夫人のオーナーですが、左に見える机に座って、南から押し寄せる津波にただ呆然としてプカプカと浮いていたそうです。

エスペランサ 木工隊 • 杉山裕次郎 • 服部 篤 • 堀内 圭